

片田孫朝日著

『男子の権力』

(京都大学学術出版会 2014年)

谷田川ルミ

本書は、学童クラブにおけるフィールドワークによる男子文化研究を積み重ねてきた著者の博士論文を元にした作品である。現場に足を運び、子どもたちや指導員たちと共に過ごしながらの地道なフィールドワークと膨大なデータの分析など、多くの労が割かれた研究成果である。

教育の場における「ジェンダーの問題」は、身近な問題であるにもかかわらず、教育の担い手たちにとって重要視されていないのではないか。研究者の側からすると、教育におけるジェンダー問題というテーマはすでに多くの先行研究が積み重ねられ、様々な学問分野の研究者から議論されているところでもあり、教育の場がジェンダーに敏感であるべきことは、すでにある程度、教育者たちの間においても共有されていることのように感じる。このような、ジェンダー問題に対する研究者と教育現場の温度差—著者の問題関心はここからスタートしている。さらに、保育の現場においては、保育者による権威的な教え込みを避け、子どもの意思や興味関心を大切にする「児童中心主義」的な教育方針を掲げている機関や教員も多い。こうした「ジェンダーへの無関心」と「児童中心主義的な保育」が組み合わさった結果、子どもたちの持っているステレオタイプなジェンダー意識が、保育の現場でのあらゆる活動の中における「介入しない教育」によって、意図せざる結果として強められてしまうのではないか。本書では学童クラブでのフィールドワークを通して、子ども間のジェンダーに基づいた社会関係、すなわち「男子」「女子」というカテゴリ間の権力関係の構造を描き出すことをとおして、子ども同士で性別による強弱関係のステレオタイプにとらわれずに互いの権威を認め合える、自立と協同の関係を作り出せ

るように支援する人権保育を提案している。

本書の最も特徴的な点は、タイトルにもなっている「男子」に注目していることである。これまで社会的弱者としての「女子」の議論に終始しがちであったジェンダー研究において、「男子」の「マイクロなレベルの日常」の実践を描くことで「男子の権力」の構造の諸相とそれが生じるメカニズムを明らかにしている。「女子だけ」でも「男子だけ」でもなく、男子間、男女間の日常の相互行為のなかから立ち上がってくる関係性を描き出しているところは、非常に興味深い。

本書は4部9章構成となっている。第Ⅰ部は「理論と方法」であり、1章で日本における「教育とジェンダー」の先行研究のレビューと第2章で本書の分析の軸となるコンネルの「覇権的な男らしさ」論、ウォーカーダインの「児童中心主義教育批判」についての検討がなされている。第Ⅱ部から第Ⅳ部にかけては本書の目玉ともいえる学童クラブでのフィールドワークによる分析となる。

第Ⅱ部「クラブ運営と自由遊び」では、保育所の運営面と保育をする側（保育者）の指導法や指導方針によって、いかに男子のジェンダーが構成されていくかが論じられている。

第3章では、学童クラブの中心的な先生による非権威的な「受容中心の保育」という方針によって、指導者から注意を受けないことで年長者の男子の権威がクラブ内で大きくなること、クラブ内においては特にジェンダーに配慮した保育が行われていなかったこと、スポーツを重視する取り組みが行われていた様子が描かれている。その結果、球技能力の高い男子が優位となり、年少者や女子を劣位にみなす言動がみられたことから、クラブ運営の面から男子・女子の権力関係が構築されていく場面を切り取っている。

第4章では遊び場面における仲間集団の男女分離といった現象から、「男子」、「女子」といったカテゴリの境界線を子どもたち自身が作り出していく姿を描いている。その中で保育者はその境界線を引き直し、調整する役割を担っている様子が説明されている。

第Ⅲ部「男子の仲間文化」は、スポーツや遊びといった日常の場面における

男子同士といった同性間における競争や自己主張による「覇権的な男らしさ」と周縁的な男子の抵抗でもある「柔らかい声」が描き出されている。

第5章では、男子間の権力構造を生み出す舞台として、スポーツやゲームといった勝敗が明確で、能力主義的な文化を持った遊びの場面が取り上げられている。ここでは「強さ」による「競争」と劣位に置かれた子どもに対する「おとしめ」といった権力構造が展開されている。さらにスポーツやゲームにおいて、強い子どもが弱い子どもに指導をするという行為によって強められている。これは男子間のみならず、男女間でも見られる関係であるが、女子の中でもずば抜けて運動神経やゲームの能力が優れており、押しの強さと攻撃性を持っていれば、男子と対等の関係を構築できるということも描き出されている。また、男子間において劣位に置かれた男子が、年少者や女子を支配するような行動をとることがあり、そこには権力に対する共謀と折り重なる従属関係が展開されているといった複雑な男性支配と権力関係の構図が存在していることを明らかにしている。

第6章では、スポーツのように先生からも認められている正当性のある遊びではなく、日常のやり取りの中の「ふざけ」や「からかい」、「罵り」といった攻撃的な行動、言動をとりあげ、それが男子文化として日常化していく様子が克明に描き出されている。

一方、これまで本書で扱われてきた「強さ」や「攻撃性」といった男子文化から距離を置いている男子も存在する。例えば、大声で泣いたり、「痛い」「怖い」といった声を上げたりすることによって、大人に助けを求めたり、攻撃的な男子に対して行動の修正を求めたりする行動などである。第7章ではこうした男子の間の仲間文化の展開が単純ではない様子を取り上げ、攻撃的な罵りの声とは対照的な「柔らかい声」として、その異質性と権力に対する抵抗性について論じている。

第IV部「保育の指導法と男子の権力」では、これまで描き出してきた学童クラブにおける男子の権力の展開と保育者の指導法との関係について、「受容中心の保育」、すなわち児童中心主義の保育がジェンダーの問題に対してどのような影響を与えてきたのかについて論じられている。

第8章では、学童クラブの帰りの会の場面において、腕白なふるまいをし、

先生に対して野次を入れる男子の姿を取り上げている。女子に比べて男子の振る舞いが幼いのは、大人への権威への挑戦であり、逸脱の意味を持っているとし、それこそが「従順さ」と対極にある「男らしさ」を示している。また、粗暴なふるまいは男子間における強さを示すものであり、一方で、女子に対する「おとしめ」でもある。こうして男子は「男の子らしい文化資源」を用いて存在感と発言権を獲得し、自らを高く位置づけている。こうした男子の振る舞いに対して、教師や保育者ができるだけ子どもの意思を尊重し、教師としての権威を振りかざさずに伸びのびとした保育の場にするといった「受容中心の指導」を行うことによって、教室において、強さと権力を持った男子が優位に位置づけられ続けてしまうといった意図せざる結果を生んでいるという指摘がなされている。こうした、「保育者－男子」の関係は、そのまま教室内の強弱関係、すなわち「女子－男子」関係を規定することとなる。

続く第9章では、保育者に対するインタビューをもとに、これまでの章で描かれてきた学童クラブの制度、男子による女子に対する野次、男女の分離といった問題に対する指導員側の認識を記述している。インタビューの対象となった先生は、これまで参与観察で描かれてきた「受容中心の指導」を実践しており、子どもたちが「ほっとできる」自由な場であることを望んでいる。さらに、男の子／女の子といったカテゴリにもあまりこだわらず、ジェンダーに対しても無関心である。子どもを「個人」として捉え、男女という性別によるカテゴリから子どもを見ていない。著者は、こうした「児童中心主義」的な保育者のスタンスは、意識の上では子どもたちの個性を受容し、課題を抱える子どもの成長を支えるという側面を認めつつ、意図せざる結果としての「ジェンダー・ブラインドネス」、つまり、ジェンダーの問題を主題化できず、結果として、既存のジェンダー規範による男女間の強弱関係、さらに言えば「男らしさ」による男子間の優劣関係がそのまま維持されてしまうことに警鐘を鳴らしている。

子どもが自然に身につけてしまったジェンダーのステレオタイプと、それ故に生み出される他者の尊厳を侵害するような男子文化に対して、干渉も介入もしない児童中心主義的な教育のままでいいのか。このような観点から、終章においては、ジェンダー平等、そして子どもの人権と公共性に配慮した教育の必要性が提案されている。

本書は、丁寧なフィールドワークとインタビュー調査によって、学童クラブにおける子どもたちのリアルな日常を描き出しているため、臨場感にあふれる読み物としての面白さのみならず、実証研究としても説得力があるものとなっている。また、マイクロなレベルを扱ってはいるが、子どもの人権や公共性といったマクロなレベルへの提言を行っている。この点、若干の飛躍を感じないわけでもなかったが、このマイクロとマクロを橋渡しした視点によって、子どものジェンダー形成と保育者の在り方といった問題点の発見にもつながっており、本書に収められている一連の研究の意義が感じられた。

その上で気になる点もあった。本書では攻撃的なことを好まない男子たちを調整役としての側面から捉えていたが、こうしたステレオタイプな「男らしさ」から距離を置いている男子は少なくないように思える。彼らが男性性から距離を置くこと、つまり「男らしくない自分」であることをどのように解釈しているのか、そこには葛藤はあるのか。これもまた男子文化の一側面であると思われる。他方、自らの「強さ」を声高に主張することで優位性を保っている男子たちにも、競争から降りられないつらさがあるかもしれない。著者が指摘するように、児童中心主義の保育が行われることによって、既存のジェンダー関係が維持され続けてしまうのだとすれば、こうした「男らしさを維持するつらさ」も延々と維持され続けてしまうのではないだろうか。欲張りな願いではあるが、こうした観点から分析した著者による「男子論」も読んでみたい。

子どもの「ありのまま」「多様性」を大切にすることが故に、その時点で子どもの中に構築されているステレオタイプがそのまま維持されてしまう。これは、ジェンダーに限らず、差別問題などにも同様のことが言えるだろう。多様性を許容する教育がいかに難しいかを実感させられるところである。しかし、教育者はその難しさに立ち向かい、子どもとかわり続ける必要があることに気づかされる点で本書が果たす役割は非常に大きいと感じた。